先住民族のガバナンス

―自治権と自然環境の管理をめぐって―

アイザック・ビシャラ
マーセリーン・ノートン
ロジャー・スカーヴィック

小野有五㈱

1　北海道と先住民族　03

2　心の命じるままに
Me Kii taku ngakau - Let my heart speak　10

3　フパ民族の強靱なる抵抗、そして文化の活性化
Hoopa Nation: The resilience, resistance
and revivification of a people　27

4　歴史における決定的瞬間
A decisive moment in time　40

この「ACADEMIA JURIS BOOKLETシリーズ」は、北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センターが主催して行ったシンポジウム・講演会等の内容を記録するものです。

本号には、二〇〇三年八月三日、北海道大学学術交流会館小講堂で行われた国際シンポジウム「先住民族のガバナンス―自治権と自然環境の管理をめぐって―」の中から、三氏の講演の模様を収めました。

先住民族のガバナンス―自治権と自然環境の管理をめぐって―

1　北海道と先住民族

司会（小野有五）　北海道大学の地球環境科学研究科の小野有五と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムのタイトルは「先住民族のガバナンス」です。「ガバナンス」という言葉はまだ耳にしたことがない方も多いと思いますが、「ガバメント」（政府　※（　）内編集部注。以下同様）に対置される言葉と私たちは考えております。つまり、「人々を上から支配する」というよう

な意味のガバメントに対して、ガバナンスは「人々が自分たち自身で自分たちの社会をつくっていく」というような、「下からの統治」を意味する概念であるとご理解ください。

現代は、世界が一つになってしまおう、文化的にも政治的にも世界を一つにしてしまおうというグローバリゼーションの時代です。そうした時代にあって、またそうした時代だからこそ、先住民族によるガバナンスは特に重要な問題です。

今日は、ニュージーランドのマオリ、アメリカのフパ、そしてノルウェーのサーミの三民族の方々とともに、先住民族のガバナンスについて考えたいと思います。

アイヌ文化振興法と先住性

司会（小野）　今回のシンポジウムを北海道で開く意味は言うまでもなく、先住民族のアイヌ民族の問題があるためです。日本では、十九世紀末、一八九九年に「北海道旧土人保護法」という極めて差別的な法律が制定されました。そしてこの法律は、一九九七年まで、なんと百年近くも続いてきました。先進国ではとても考えられないようなことが起こっているのです。

皆さんもご承知のように、北海道旧土人保護法廃止後にいわゆる「アイヌ文化振興法（アイヌ

文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律）」が制定されたのですが、アイヌ文化振興法にも依然としてたくさんの問題が残されています。その中で一番大きな問題は、アイヌ民族の先住性がきちんと認められていないこと、つまりアイヌ民族の自治権や土地権、そして特に今日の話題にしたいと考えている自然環境の管理権が全く認められていないことだと思います。

アイヌ文化振興法では、アイヌ文化の尊重や伝承が非常に強調されているのですが、文化を成立させている基本的なものは、やはり、その文化の背後にある自然環境です。その自然環境が一方的に破壊されてしまっている現状では、文化の伝承は極めて困難な状況なのです。

壊されてきたアイヌモシリ

司会（小野）　まずこの百年間の土地利用の変化を見ても、まったく違います。百年前の北海道は本当に森と湿原の島だったわけです。この姿こそがアイヌの人々にとっての、アイヌモシリ（アイヌ語で「人間の土地」という意味）であったわけですが、百年経った現在、まずその自然環境そのものが非常に大きく変えられてしまいました。そのことがアイヌの人々にも非常に大きな影

響を与えているのです。

例えば、道東の根釧原野では、森林だったところもどんどん牧場化されました。牧場が川沿いまで広がったため河畔林もなくなり、川は牛の糞尿で汚されてしまいました。そうなる前には、秋になるとたくさんの鮭が川を上り、アイヌの人々の冬の食料となっていましたが、日本政府は鮭漁を禁止してしまいました。それだけではなく、鮭は人工ふ化のためにほとんど河口で取られてしまい、川を上っていくことさえ、できなくなってしまいました。

アイヌ民族の重要な神様、カムイであるシマフクロウも、現在、絶滅危機種（絶滅危惧〔Ⅰ〕A類）になっており、今や北海道全域で百三十羽しかいません。それには二つの理由があります。一つは先ほど申しましたように、鮭が全部河口で取られてしまい、上流に上がれないためです。シマフクロウは鮭を食べる鳥ですから、まずエサがなくなってしまったということですね。もう一つは、大きな木が全部切られてしまったこと。非常に体が大きいシマフクロウは、木に自然にできた洞（うろ）を巣にしています。しかしそういう、洞のある木は全て伐採されてしまったのです。

アイヌの人々のもう一つの重要な神様であるヒグマも、シマフクロウほどではないものの、絶滅の危機に瀕していますし、「イオマンテ（熊送り）」という、アイヌ民族にとって最も重要な宗教的な儀式さえ、法律で禁止されてしまいました。

アイヌ語の復権を求めて

司会（小野）　「銀の滴（しずく）降る降るまわりに」という有名な冒頭で始まる「梟（ふくろう）の神の自ら歌った謡（うた）」は、シマフクロウの神様の歌った謡です。それを最初に掲げている『カムイユカラ（アイヌ神謡集）』を書いたのが、ちょうど二〇〇三年に生誕百年を迎える知里幸恵（ちり・ゆきえ）というアイヌの女性です。

彼女は口承文芸として語り継がれてきた『カムイユカラ』をアイヌ民族として初めて文字に記録しただけでなく、それを見事に日本語に翻訳しました。『カムイユカラ』は『源氏物語』と並ぶ世界文学だと思うのですが、知里幸恵や『カムイユカラ』のことは日本でもほとんど知られていません。また、アイヌ語の公的な教育も行われていません。

このユカラには、シマフクロウだけではなく、たくさんの動物たちが登場します。そうした生き物たちが非常に身近に住んでいたアイヌモシリというものを、私たちが壊してしまったのです。このアイヌモシリや、そこで使われてきたアイヌ語を取り返すことができなければ、アイヌ民族の本当の意味での文化の振興というものはないと思います。

それから、北海道の地名は、本来、ほとんどがアイヌ語の地名ですが、現在の地名の看板というのは、日本語だけが大きく書かれていて、アイヌ語は、単にその由来として小さく添えられているに過ぎません。

例えばこんな例があります。「川真珠貝」という、やはり絶滅が危惧されている淡水棲の貝がありますが、アイヌ民族はこれを「ピパ」とよび、ピパが多い川を「ピパイロペッ」と呼びました。「ペッ」は川のことです。ところが和人はそれに「美生川」という漢字をあて、初めはそれでも「ピパイロがわ」と読んでいたのですが、今や「ビセイがわ」と読ませているのです。これもアイヌ文化の抹殺だと思います。私はまず「ピパイロペッ」と「美生川」を同じ大きさで平等に併記することから始めたいと思っています。

大雪山や日高山脈のようにまだ比較的自然がよく残っているところは国立公園や国定公園になっていますが、そうした地域の自然を管理する権利を、先住民族であるアイヌ民族が持つということが、国立公園などの管理にとっても非常に大事なのではないでしょうか。

さて、これからスピーカーの方々の講演に移らせていただきたいと思います。この後、最初にお話しいただくのがニュージーランドからいらっしゃいましたマオリのアイザック・ビシャラさ

んです。それから二番目のご発表が、アメリカのカリフォルニアから来られましたフパのマーセリーン・ノートンさん、それから、サーミのロジャー・スカーヴィックさんからご発表をいただきたいと思います。

それでは最初のスピーカーのアイザック・ビシャラさんです。アイザックさんはニュージーランドのマオリの、特に青少年の教育のアドバイザーをなさっていらっしゃいます。アイザックさん、よろしくお願いします。

2　心の命じるままに

Me Kii taku ngakau - Let my heart speak

マオリの過去・現在・未来

アイザック・ビシャラ　まず、この大地とここに住む全ての人々、文化、山河、生息する全ての動植物に、そして、このシンポジウムを開催された北海道大学高等法政教育研究センター、小野有五先生、ワールドユースキャンプの実行委員の方々の洞察力と実行力に敬意を表したいと思います。

私たちの文化では女性の力が非常に高く認められており、こういった集まりの開会は女性が告げることになっています。先ほど、私が舞台に上がるために通る道を、一緒に来日したヘラが露払いしてくれました。私は舞台に上がり、これからスピーチをする力と明晰（めいせき）さを与

えてくださいと祈りました。それに対してジェフリーが立ち上がり、「あなたはマオリである」(注)と応じることで、私がスピーチをする心の拠り所を再確認させてくれました。

今日は、マオリ民族がいったいどこからやって来たのか、植民化の時代にどのようなことが起こったのか、現在はどんな状況なのか、これから先どのような方向に進んで行きたいと考えているのかということについてお話ししたいと思います。

時間が限られておりますので、便宜上「マオリ」という呼称を使ってお話しいたしますが、マオリ民族などというものは、実際には存在いたしません。私たち民族を表す正しい言葉を使って話を始めると二週間はかかります(笑)。おいおい、その理由についてもご説明します。話を聞いていただければ、マオリ民族についての神話がどれだけ伝えられてきたかということをご理解いただけると思います。それではまず、過去の話から始めたいと思います。

(注)「マオリ」は一般的に「ニュージーランドの先住民族」を指しているが、植民地化当初、入植者が先住民族を総じて呼んだ名称であり、実際は何百ものグループに分かれている。さらに、この口上での「マオリである」ということは、「アイデンティティをもって生きる一人の人間である」という意味を有している。

ノース・アイランド誕生の伝説

ビシャラ　私たちの祖先に、マウイ（Maui）という半神半人、つまり半分人間であり半分神の少年がいます。彼は大人数の兄弟の末っ子で、いろいろといたずらをしては兄たちを困らせていました。

ある日、兄たちが魚釣りに行こうとしたとき、マウイは自分も連れて行ってほしいと頼みました。しかし兄たちは、「お前は全然働こうとしないし、足手まといになるから面倒だ」と、マウイを連れて行こうとしません。

そこでマウイは前の晩からカヌーに隠れました。兄たちは何も知らず、マウイを乗せて出発してしまいます。漁場に着き、さあ漁を始めようという時になってマウイは飛び出し、「もうここまで来ているのだから、一緒に魚釣りをさせてよ」とお願いします。それにもかかわらず、兄たちが「こんな奴と一緒にいたくない。海に投げ込んで、魚のエサにしてやろう」と怒るので、マウイは「ちょっと待って。兄さんたちよりもずっと大きな魚を釣ってみせるから。もし兄さんたちのより小さかったら、その時は僕に何をしてもいいよ」と宣言します。

そうはいっても、マウイは魚釣りの道具を持っていません。兄たちが「釣りの道具は貸してやらない」と言うと、マウイは亡くなったおばあさんがマウイに残した顎（あご）の骨を取り出し、それに自分の髪の毛をくくりつけて、釣竿を作りました。それから、自分の鼻をげんこつで殴って鼻血を出し、その血を骨に擦り付けてエサにしたのです。

長い時間、兄弟は魚がかかるのを待ちましたが、何もかかりません。兄たちは「もうすぐお前をカヌーから放り出して、エサにして魚を釣ってやる」とマウイを責めますが、マウイはただ黙ってじっと待ち続けました。すると、それまで見たこともないような、ものすごく大きな魚がマウイの釣竿にかかったのです。あまりにも大きすぎて、引き上げることさえできないような魚です。

マウイは兄たちに魚を引き上げるのを手伝ってくれるように頼みますが、彼らは応じません。仕方なくマウイは、祖先に祈りながらたった一人で、一生懸命釣竿を引っ張りました。魚がまるで海底から上がってくるかのごとく海面まで近づいてくると、海はだんだん泡立ってきました。兄たちは肝をつぶして、すぐに魚を放すようにマウイに言います。しかしマウイは力をゆるめず、祖先に祈り続けました。

そしてとうとう、非常に巨大な、今まで見たこともないような大きさの魚が釣れたのです。兄たちは驚いて魚を見つめました。マウイは兄たちに「まずこの魚に祈りを捧げよう。僕は祈りを

捧げてくれる人を呼んでくる。ここでじっとしていてくれ」と言います。しかし、残された兄たちの心の中では欲望がムクムクと頭をもたげ、やがて彼らは魚に飛び乗って、「ここは俺のものだ」と言い争いながら、どんどんどんどん魚を小さく刻んでいきました。

祈祷師（きとうし）を連れて戻ってきたマウイはこの光景を見て、やめろと泣き叫びます。しかし時は既に遅く、魚は小さく切り刻まれ、もう元の形に戻ることはありません。

これが私たちの住むニュージーランドの北島、ノースアイランドがどのようにしてつくられたかということにまつわる伝説です。この島はマウイが釣った魚の形をしていると言われています。

二度の大きな入植と黄金期

ビシャラ　ノースアイランドが誕生したとき、まだ、島に人間は住んでいませんでした。そのうち植民地化の歴史が始まるわけですが、入植が始まるはるか二千年前に、ポリネシアの海を行く人々が、まだ名前もなく、だれも住んでいない現在のニュージーランドに到着したわけです。当時彼らは既に、太平洋のいろいろな場所を船に乗って渡り歩いていました。最初にこの島にやって来た人というのは、マオリの祖先ではありません。後にマオリという呼び名をつけられる人々

の祖先です。

マオリたちは、祖先代々の土地を「ハワイキ（Hawaiki）」と呼んでいます。ハワイと似ていますが違います。ハワイキというのははるか昔、有史以前の場所なのです。マオリの祖先はどこからこの地にやって来たかということについては、いろいろな説があります。アジアから来た、あるいは南米から来たという説もあれば、空から降ってきたという説もあります。また、ずっとずっと昔から、最初から今の場所にいたのだという説もあります。

マオリと呼ばれる人々の祖先が二千年をかけて育んだ文化は、土地や自然環境、土地の持つ精神性、土地の人々などに大変近い関係を持つ文化でありました。

一七六九年、クック船長がニュージーランドに到着します。マオリと呼ばれる人々の祖先が到着したのを第一次入植としますと、クック船長が到着してから始まるのが第二次の入植の時代になるわけです。一七六九年から一八四〇年にかけては、既にそこにいた先住民（第一次入植者）とクック船長以降入ってきた入植者（第二次入植者）との間に、黄金期とも呼ばれる大変よい関係が築かれた時期でした。つまり、主権を持っているのは先住民（第一次入植者）だということを第二次入植者は理解し、受け入れていた時代だったのです。

ワイタンギ条約から始まった異変

ビシャラ　一八四〇年になりますと、ワイタンギ条約（Treaty of Waitangi）が締結されます。この時から全ての問題が始まったのです。一八四〇年から二十世紀初頭までの間に、マオリに一体何が起こったのか、マオリの主権、文化、自然資源にどういうことが起こったのかについて皆様にご理解していただくために、これからデモンストレーションを行いたいと思います。

観客席からどなたかお二人、前に出ていただけますか。それではまずこちらのジョーにお願いします。ジョーが象徴するものはニュージーランドの先住民の主権、全ての自然資源などに対する権利で、一八四〇年にワイタンギ条約が結ばれるまでマオリに認められていたものです。

ジョーは、東西南北どちらでも、いつでも自分が行きたい方向に歩いていくことができます。また、魚や鳥をとるのも、森で木を育てたり、農業をするのも、自分の思うままです。ジョーはまた、共同体の人々によって選ばれた偉大なる指導者でもあります。それは、彼自身が自分を指導者であると選んだのではなく、彼の共同体の他の人々皆によって選ばれたからです。それがマオリのやり方です。彼はとても親切で、難しい決定が必要な時には厳しい態度で臨むこともでき、

ハンサムで、多くのお姫様がジョーと結婚したいと思っていました。もっとも、ジョーのお嫁さんを選ぶ上では、ジョーのお母さんが多大な発言権を持っております。ジョーはアルコールやドラッグ、ギャンブルの問題も起こしていません。

一方、もう一人のタミヨは、この土地に新しく入ってくる人を象徴しています。彼らは大変勇気があり、大胆な人々です。自分たちの新天地をどのように切り開いていくかというヴィジョンを持っています。また、神は自分たちの側にあり、自分たちにはどんなことでも行う力が与えられていると信じています。科学とテクノロジーをもって世界を征服できると思っている人々です。

彼らがニュージーランドにやって来ました。新しい訪問者は長い航海の後で腹をすかせ、見るも無残な様子であるため、ジョーは彼らを優しくもてなします。一七六九年から一八四〇年にかけては、新しくやって来た人と、もともとその土地にいた人々はとても良い関係を築いていたわけです。

しかしすぐに、もっと多くの入植者がやって来るようになりました。いろいろなところから新しい人々がどんどん入植してきます。主に英国、オランダ、ポルトガル、スペイン、アメリカ、ロシアなどから。流入した入植者は皆、自然資源を求めており、このニュージーランドという新しい土地からそれぞれの国に資源を持ち帰ります。土地を確保し、国を強くすることを使命と考

える国の人々だったのです。

英国政府と二つの法律

ビシャラ　このような入植者が増えるにつれ、いろいろな問題や揉め事（もめごと）も起こるようになります。ジョーは、どうしてこの新しい入植者たちは争いばかりしているのだろうと心配します。そんな時、入植者の間で大きな権限を持つようになった英国政府が、ジョーに問題解決の手助けを申し出ます。

ジョーはその考えに同意しました。すると英国政府は、入植者の管理の権限を英国政府に与えると書いた書類にサインを求めてきたのです。

ジョーはこの要望についてじっくり考えました。一族や友人、他の首長などにも相談したところ、首長の大多数が賛成したので、彼はサインすることに決めました。彼は、よい協力関係を築けたことに喜び、これで揉め事を解決する助けが得られると思っていました。

ところが、英国政府の考えていたことは全く逆でした。英国政府は、このサインをニュージーランドの国土全てを統治する力を得る第一歩と捉えていたのです。英国政府はまず新しい政府を

設けました。政府は、国土を治めるためいろいろな法律を定めますが、その中には、ジョーの将来に非常に大きな影響を与える法律が二つ含まれていました。

しかし、彼は、このような事態が起きていることを全く知りませんでした。ジョーは、全てが何事もなく順調に進んでいると思っていたのです。なぜならジョーは、彼らのリーダーであるマオリの女王を守るという固い約束を英国政府から取り付けていたからです。

ニュージーランド入植法と反乱制定法

ビシャラ　この二つの重要な意味を持つ法律、すなわち「ニュージーランド入植法（The New Zealand Settlements Act）」と「反乱制定法（The Suppression of Rebellions Act）」は、一八六三年に制定されました。英国政府は、ニュージーランド入植法に従って、測量士たちにニュージーランドの国土を測量する権限を与えました。明らかに、政府を賄っていくために必要な財源として、新しくやって来る入植者たちに国土を切り売りするのが目的でした。

さらに、反乱制定法によって、先住民が測量士を妨害すれば反乱とみなす権限が政府に与えられました。反乱者だとみなされると、その人の土地は取り上げられてしまいます。これら二つの

法律により、三百万エーカー（百万エーカーは約四平方キロメートル）の土地が、一八九六年までの間にジョーから取り上げられました。

このような過程を経て、ニュージーランドの国土管理運営権は新しくやって来た政府の手中に収まりました。ジョーにはまだ自分の土地が残されていましたが、土地の管理や文化に関しては以前と同じ権限は持っていませんでした。そんな状態がその後も続き、もともとニュージーランドの北と南の島を合わせると六千六百五十万エーカーあった土地のうち、一九三六年の時点でマオリに残されていたのは、わずか四万二千エーカーとなりました。

ジョーが失ったのは土地だけではありません。新しい政府が一九〇七年に制定した「トフンガ抑制法（Tohunga Suppression Act）」によって、文化の伝承も禁じられます。トフンガとは、伝統的な儀式の専門家、伝承者です。自分たちの言葉を話すこと、自分たちの歌を歌うことを禁止され、さらに英国政府にとって望ましくないことを行う権利をことごとく剝奪（はくだつ）されたのです。

一九五〇年になる頃には、ジョーはアルコールと麻薬に蝕（むしば）まれ、もうハンサムではなくなっていました。お姫様も全くいません。ジョーは大変深い悲しみの底に沈んでいましたが、希望の火が消えたわけではありません。ジョーは強く、どのような状況にも順応する力と能力を

祖先から与えられているのです。

マオリの人口増加の裏側には

ビシャラ　一七六九年の時点で、マオリの総人口は二十万から三十万人でした。それが一八九六年には四万二千人に、一九三六年にはわずか一万一千人にまで減少します。その頃、ニュージーランドの新聞は、マオリは死に絶えつつある民族で、まもなくマオリの文化は全て消滅するであろうと書き立てました。ジョーはこの記事を読んで、笑い飛ばします。八五年には自らをマオリと称する人々、マオリであると感じる人々の数が八万人に増加します。さらに、二〇〇二年にはその数が五十万人にまで達するのです。

二十年にも満たない短い期間で、マオリの人口がこれほどまでに増えたのはなぜでしょうか。もちろんマオリは子どもをつくることが好きですが、わずか二十年でこれほど多くの子どもをつくることは難しい。一体何が起こったのでしょうか。

土地を奪われ、マオリの文化、教育、独創性が壊滅的な打撃を与えられた時代、マオリは、マオリであることが価値の無い、恥ずかしいことのように感じていました。そこで、自らをマオリ

であると考えようとしなかった人々が多かったのです。

このような状況の下、国勢調査やさまざまな研究を通じてニュージーランドのマオリ以外の人々はマオリの数がどんどん減っていると考えていたのですが、実際には、数多くのマオリが自分はマオリであるということについて口を閉ざしていただけのことだったのです。マオリはずっと存在し、マオリの文化もずっとそこにありました。そんな中で、一九五〇年から二〇〇〇年にかけて、マオリのアイデンティティに非常に大きな変化を及ぼすさまざまな出来事が起こったのです。

マオリのアイデンティティとグローバリゼーション

ビシャラ　ワイタンギ条約の結果、植民地化されたことで、マオリはいろいろな被害を受けました。それにもかかわらず現在では、生態系、自然保護、経済活動、テクノロジーの上でも、マオリはニュージーランドの技術的な権限を持っているマオリ以外の人々、つまり後から入植してきた人々にほとんど引けを取らないところまで到達しています。ニュージーランドの主権がマオリ以外の人々の手にあるということは現在でも変わりませんが、マオリの人々はマオリ以外の人々

に自分たちの文化を理解してもらおうと努めてきたのです。

これに対し、マオリ以外の人々は先住民の文化を理解しようとせず、怠惰な態度を続けてきました。もちろん、マオリという大家族の中に自分たちが入ってきたのだという考えもある程度浸透していますが、両者の間には壁があり、本当の相互理解に達するまでにはまだまだ時間がかかります。

マオリはこのように長い期間いろいろな抵抗をしてくる中で、力を蓄え、大変強靱（きょうじん）な民族になりました。したがって、現在世界を席巻しているグローバリゼーションの波は、マオリにとっては何も新しいことではないのです。もちろんグローバリゼーションには今までにない問題もありますが、マオリが大変長い間ずっと戦わなければならなかった問題と比べると、大きなことではありません。今までどおり戦い続けるだけのことです。

しかしマオリではない人々にとって、グローバリゼーションは非常に大きな不安をもたらすもののようです。彼らは今まで自分たちの文化の喪失という危機に直面したことがないので、文化を守っていく、伝えていくということに対する意識、ヴィジョンを持っていなかったためです。マオリも同じくグローバリゼーションが抱える問題に直面していますが、先ほども申し上げたような意味で、そうしたことは笑い飛ばせるような状況にあります。

これが現在のニュージーランドの国家共同体の姿です。マオリ側もマオリでない側も、同じくグローバリゼーションに直面しています。さらにマオリは、今まで受けてきたいろいろな傷から立ち上がるのにまだまだ課題を抱えています。一方、マオリではない側も今まで直面したことのないグローバリゼーションという問題にどのように立ち向かうべきか頭を抱えている状態で、マオリに知恵を貸してほしいと頼んでいるのです。

これまでマオリがたどってきた過程は、大きな痛みを伴うものでありました。時が経った現在でも、その歴史から受けた傷がさまざまな面で残っています。例えばマオリの教育、経済力、健康状態などを統計で見ると、決して好ましい状況とは言えません。しかし、マオリは自分たちの文化を守ってきました。マオリには、文化を剝奪しようという勢力と戦ってきた中で培ってきた力があります。この力をマオリではない人々がマオリの中に見出し、自分たちにも分けてもらいたい、学びたいと感じ始めているのです。

新たな共通のビジョンを目指して

ビシャラ　マオリと非マオリの政治的な立場はまだはっきりと解決されてはいません。まだまだ

数多くの懸念事項が残されています。しかし、これから共にグローバリゼーションに立ち向かっていく上で、マオリと非マオリの間に共通のヴィジョンが必要になることは明らかです。両者が手を携えて共に戦ってこそ、良い結末が期待できると私は考えています。

私たちの祖先はハワイキからニュージーランドまで星を頼りに航海してたどり着きました。これから歌う歌は、星を眺めながら航海をするという歌です。その水平線の上に浮かぶものがニュージーランドでした。

グローバリゼーションという新しい時代を迎え、これから先、私たちがどのようなところに到達するのかを私は知りません。しかし、どのようなところに到達しようとも、私はそれほど気にしません。なぜなら、どこにたどり着くかではなく、だれと一緒に航海をするかということの方がよほど気になるからです。私と一緒に行きたい人はだれでも歓迎いたします。どこに到達しようとも、どこにでもいろいろな問題、挑戦しなければならないことが待っています。最も重要なのは現在共に航海しているということ、この現在を楽しむことではないでしょうか。（以下、歌唱）

Kanapa mai, kanapa mai, kanapanapa mai i te rangi,
Te whānau mārama, te whānau mārama, i te rangi.

Takahuri, takahuri, takahurihuri i te rangi,
Te whānau mārama, te whānau mārama, i te rangi.

司会（小野）　私はアイザックさんのお話のタイトルをご紹介するのを忘れていましたが、英訳しますと、レット・マイ・ハート・スピーク（let my heart speak）、「私の心の命じるままにお話したい」という意味です。大変心に残るお話でした。アイザックさん、そしてご協力したいただいた方たちにお礼を申し上げます。

それでは続いて、次のスピーチに移りたいと思います。スピーカーはカリフォルニアから来てくださったフパのマーセリーン・ノートンさんで、フパのエデュケーション・ディレクターという、教育局長のような役割を果たされています。タイトルは「フパ民族の強靱なる成功、そして文化の活性化」です。ノートンさん、お願いいたします。

3　フパ民族の強靱なる抵抗、そして文化の活性化
Hoopa Nation: The resilience, resistance and revivification of a people

北米の先住民族フパ

マーセリーン・ノートン　皆さん、こんにちは。マーセリーン・ノートンと申します。この場に呼んでいただいたことを大変光栄に思っています。ワールドユースキャンプの実行委員の方々、小野有五先生、北海道大学、アイヌの方々、そしてこのような催しを実現するために日々ご尽力くださった皆様に心からお礼を申し上げます。

私はカリフォルニアから、長老一人と、私たちの文化を守り伝承していくために非常に積極的に活動している六人の若者と共に参りました。これから私たちフパ民族のお話を聞いていただきますが、内容は先ほどのマオリの方のお話と非常に似通ったところがあると思います。同じよう

なことが北米の先住インディアンにも起こったのです。

私の今日のスピーチのタイトルは、「フパ民族の強靱なる抵抗、そして文化の活性化」というものです。フパ民族の今までの苦闘、その上でどのような忍耐が必要であったか、それを支えてきた精神性、私たちの魂と心についてお話ししたいと思います。

私たちは「フパ」と呼ばれていますが、これは私たちが自分たちのことを呼んでいた言葉ではありません。もともと私たちは自分たちのことを、道の両側の人という意味の「ナーティニ・ウェ（NA: TINI-XWE）」、あるいは、「どんぐりを食べる人々」という意味の呼び名で呼んでいました。フパとは、近隣の他民族が私たちのことを「フパァ」と呼んでいるのを聞いて、英語を喋る人々が言いなおした言葉です。「フパ（HUPA）」と書く場合は「フパ民族」を意味し、「フーパ（HOOPA）」と書くと「フパの土地」を意味します。

伝説によると、私たちはこの聖なる土地（会場では「フパの大地」の地図が示されていた）から生まれてきたとされており、私たちはそれを信じています。トリニティ川という川が真ん中に流れるこの渓谷が私たちの大地です。私たちは「川の民」とも呼ばれています。川は交通手段、あるいは食料調達のための場所として使われています。

私たちはカリフォルニア北部のフパ渓谷にあるインディアン居住地に住んでいます。他にも多

くの先住民の居住地があるところです。私たちは近隣の他の民族、例えばユーロック（Yurok）やカルック（Karuk）と文化的には非常に似ていますが、言語は違います。今日は、私たちの持つ世界観、人生に対する考え方というものについて、ぜひともお話ししたいと思います。

フパの世界観と生活

ノートン　私たちは、聖なる大地から生まれ、その大地と非常に密接に結びついていると考えています。私たちの民族はこの大地に何千年も住んできたのです。最近の考古学的調査によって、一万年以上も前に私たちの祖先が使っていた火を炊く場所が発掘されています。しかし、実際にはもっと前から私たちの祖先はここに住んでいたのではないかと私たちは考えています。どちらにせよ本当に長い間、私たちの民族がそこで生活をしていたのです。

私たちの世界観の根底には、人間は全ての生きとし生けるものと密接に繋がっているという考え方があります。人間が上に立つのではなく、他の生き物と同等な関係を持つという考え方です。そして私たちの儀式、宗教は、われわれ人間がどう生きるべきかを表しています。

私たちの伝統的な家屋は、シダーという杉の一種を板状に切ったものによって作られています。

スウェットハウスや聖なる場所、聖なる家と呼ばれるビッグハウスがあります。レッドウッドという木でできたカヌーもあります。私たちの住んでいるところにレッドウッドはありませんので、このカヌーは近隣のユーロック民族が作ったものです。何かと交換して手に入れました。私たちはカヌーも生きたものであり、肺や心臓があると信じています。

私たちの帽子は、貝やキツツキの羽を使って装飾が施されています。赤いのはキツツキの羽、白いのはワシの羽です。私たちにとってキツツキやワシは、いろいろな儀式にも登場する聖なる鳥です。帽子にはスプルースと呼ばれる針葉樹の根っこを使って編んだものや、その他にもベアーグラス、メイグンヘアーというシダの一種を使ったものもあります。こういったものを編むとき、編み手は祈りをささげながら編みます。なぜなら、帽子もバスケットも生きているものだと私たちは考えるからです。ですから、そうしたものには精霊（スピリット）が出入りするための穴も施されます。木をくり貫いてつくった袋状のもの入れなどにも、いろいろな象徴的な模様が施されます。

遊びでは、スティックプレイという棒を使うゲームがあり、ホッケー、レスリング、サッカーを混ぜ合わせたような大変荒々しいもので、男の人々が戦います。一方、踊りにはいろいろなものがあり、ワールドユースキャンプでは、私たちの長老と若者で、子どもを癒すための踊りを皆

様にお見せしたいと考えています。

私の祖父は、ディアースキンダンス、つまり、シカの皮を使った踊りを十日間にも渡って踊り続けました。踊りながら川沿いにずっと移動し、最後にはエイコーンという木の森で終わります。この踊りは、シカの霊に敬意を表すためのものです。

聖なる場所に敬意を払った踊りもあります。私たちの住んでいる峡谷は私たちにとって大聖堂のような聖なる場所なのですが、どう生きるべきかということを教えた聖書のようなものにも、いくつかの特別な聖なる場所が記されています。

聖なる大地をめぐる戦い

ノートン　フパ族が、初めて白人と遭遇したのは一八二八年でした。歴史の教科書を紐解けば、カリフォルニア州は一八四九年以降、金鉱や砂金目当ての採掘者たちにひどく荒らされたことがお分かりだと思います。彼らが来たことで、私たちの生活も非常に大きく混乱しました。採掘者たちは、それ以上考えられないほど悪質な人々でした。

私たちが住む渓谷は本当に美しい場所です。私たちをここから他の場所に移動させようとする

試みが、何度も何度もなされました。私たちの大地には、採掘者や入植者、後には兵士まで送られてきたのです。しかし、私たちの民族の戦士である「フパ自由の戦士」はフパの女性、子ども、老人を山に匿（かくま）い、保護しながら、戦い続けました。近隣のいろいろな民族も加勢をしてくれました。

アメリカ全土の他の先住インディアンの民族と比べて、カリフォルニアの先住民は最も大きな被害をこうむった人々だと思います。ある時には、カリフォルニアの南部に移動させられそうになったこともあったほどです。

しかし、こうした困難にも関わらず、フパ自由の戦士たちの強靱な抵抗のおかげで、私たちは自分たちの土地に残ることができたのです。一八六四年には、アメリカ政府との間で平和友好条約が調印されました。結局、批准されることはなかったのですが、この条約の結果、フパ・インディアン居住区がつくられまして、私たちは私たちの土地にずっと住み続けることができる保障を得たのです。

「主権」をめぐる問題は尽きない

ノートン　今、申し上げましたように、私たちは自分たちの大地に残ることはできましたが、他にも私たちを抹殺しようというたくらみと戦わなければなりませんでした。その例を少しお話しいたしましょう。

アメリカ政府は、私たちのインディアン居住区を作ると同時に、寄宿学校も設立しました。学齢期に達すると子どもたちは寄宿学校に連れ去られ、学校では自分たちの言葉を話すことを禁じられました。これによって私たちの文化と言葉は多大な被害を受けることになったのです。

また、私たちのいろいろな儀式も、政府の役人や教師によって禁止されました。宣教師たちは私たちの儀式を異端と呼び、悪いものであると決め付けたのです。中には異端とは思わなかった人もいたかもしれませんが、結果として、私たちの儀式に使う聖なる装束といったものがワゴンや幌馬車に積まれてどんどん持ち出され、博物館などに売られたのです。

しかし、アメリカ政府のインディアン局によるこのような迫害にあっても、私たちは生き延びることができました。私たちに生き延びる力を与えてくれたもの、それは私たちの心と魂に刻ま

れた聖なる心臓です。

アメリカインディアンはどの民族も、アメリカ政府との間に特別な関係を持っています。その中で、主権が非常に重要な意味を果たしています。主権とは、私たち自身の中から沸いてくるものです。主権は言うならば聖なるものであり、私たちの世界観の中心に据えられているものです。フパも他の先住民族と同様に自治を目指し、自分たちのことは自分たちで決めようとしていますが、政府からの介入は後を絶ちません。したがって、主権に関して常にいろいろな問題を抱えているのです。

フパ・ネイションによる自然管理

ノートン　私たちの総人口二千二百人余りで構成されるフパ・ネイションは小さな町のような様相を呈しており、その復興のために、例えば健康保険、消防署、警察組織、教育機関などといった政府機関組織のようなものを自分たちで管轄しています。

私たちには自分たちの自然資源を管理する権限が与えられています。中でも山や川における資源、特に森林管理のプロジェクトについては、アメリカ全国において非常に高く評価されていま

す。この森林管理計画は、聖なる場所をずっと守り続けるという大変大きな役目を果たす使命を負っています。また、水源地を守ること、絶滅の危機に瀕している動植物を守ることも大変重要なテーマだと思います。それから、先ほどご紹介したバスケットや帽子を編む材料を集めるところ、木の実やキノコを採集するところをずっと守り続けていくことも大きな課題となっています。もちろん経済的な開発は必要ですが、そのために文化を犠牲にしていいということではありません。文化を尊重してこそ、経済活動の意義があるのです。

しかし現在、私たちの自治権、主権に大きな脅威となる問題が持ち上がっています。それは水問題です。皆さんもメディアを通じてご存知かもしれませんが、二〇〇〇年に約三万三千匹の銀鮭がトリニティ川で死にました。水位が非常に低くなっていたことと水温が上がっていたことが原因です。

ここ三十五年から四十年の間に行われた水管理が、このような事態を引き起こしたのです。フパ民族で科学的な調査をして解明した原因に対して連邦政府機関は反論していますが。ここでぜひとも申し上げたいのは、鮭が私たちにとって単なる食べ物ではないということです。私たちの精神世界に非常に大きな役割を持っている生き物なのです。このような形で魚が死んでしまったことで、フパ・ネイションは近隣のユーロック・ネイションと共に、アメリカ政府を相手に訴訟

を起こしました。

もちろん、こういった訴訟で私たちが相手にしているのは、資本主義、企業文化、企業商業文化を中心とした広大な勢力です。私たちの川から持ち去られた水の九〇パーセントが、カリフォルニア州中部、南部に運ばれています。

このように私たちはさまざまな困難な状況を抱えていますが、問題のある法制度に対しては提訴し、同時にいろいろなキャンペーン、広報活動を行うことで立ち向かっています。

法律は本当に活かされているのか

ノートン　今申し上げたのは、私たちの主権に対する措置が引き起こす脅威ですが、もう一つ、今回日本を訪ねる上で起こった出来事の中に、権利の侵害ではないかと思ったことがありましたので、それについてお話ししたいと思います。

一九七八年に制定されたアメリカインディアン宗教法（American Indian Religious Freedom Act）によりますと、アメリカ政府は政策としてアメリカインディアンを守り、その文化を伝承していくと書かれています。つまり今後は、アメリカインディアンの生来の宗教に対する権利、自

由を、政府が守っていくということです。この法律は本土のアメリカインディアンだけでなく、アラスカやハワイの先住民についても全く同じように当てはまります。権利を守るという意味には、先住民が聖なる土地に行くということや、儀式に必要なものを手に入れる自由が含まれています。儀式、宗教上の自由を守ると書かれているのですから。

つまり、儀式に必要なものを手に入れるだけではなく、それを持ち運びするための自由も条文には含まれているはずなのですが、今回日本に入国するにあたっては、いろいろと工夫して、なんとかなったのですが、ずいぶんと制限されました。これが意味するところはつまり、政府という、レベルの上の方では法律が通っても、下級役人とでも言いますか、それを施行する上で実際に私たちがやり取りをする人々にはその法律の意味するところが伝わっていない、理解されていないということを表していると思います。

強く息づくフパの文化

ノートン　いずれにせよ、このようにして私たちは、私たちの文化、言葉、精神世界から力を得て文化の伝承に力を注ぎ、そこから文化は活性化され、守り続けられているのです。また、主権

を行使するということも文化の伝承に大きな意味を持っています。

今週、キャンプの発表の場で、私たちの文化がどのように力強く息づいているかということを実際にお見せしたいと思っております。キャンプでは、若者の一人が二〇〇二年に再建設された私たちのフィッシュダム（築場）についてお話をします。去年、トリニティ川をまたがるフィッシュダムを、ここにいるシリス・ジャクソンが責任者となって、再建設したのです。

もう一つ、フラワーダンスと呼ばれている、女性が成熟したことを記念して行われる踊りもキャンプにてお見せしたいと思います。キィ・シャンは、木の皮でつくったドレスを着てこの踊りを踊ったことがあります。私もオールドフラワーダンスを踊ります。

最後にキィ・シャンに歌を歌ってもらい、私の話は終りにしたいと思います。彼女が歌うのは、女性の成熟を記念して踊るフラワーダンスで最初に歌う歌です。この歌は、創造主に対してこれから何をしようとしているかを伝えるために歌われるものです。

この歌の冒頭の歌詞は、直訳すると「私を清純な地へ連れていってください」ということですが、意味としては「私の心、考え、そして精神を、清純で邪悪のない場所へ連れていってください」というものです。（以下、歌唱）

Da:y di ding kya:w do ninya tini xwe hey

司会（小野） ノートンさん、ありがとうございました。それでは続いてノルウェーから来ていただきましたサーミのロジャー・スカーヴィックさんにスピーチをお願いします。

4　歴史における決定的瞬間
A decisive moment in time

ノルウェーの先住民族サーミ

ロジャー・スカーヴィック　まず初めにサーミを代表して、ここに出席できたことにお礼を申し上げたいと思います。こうしてノルウェーの状況を皆様にお話しすることは私たちにとって大変な名誉だと考えております。

さて、今日は「歴史における決定的瞬間」というタイトルでお話しをさせていただきます。このように名づけた理由は、ノルウェーで今年から来年にかけて非常に重要な決定がなされようとしているからです。この決定が私たちの土地権に及ぼす影響は計り知れないものがあります。それでこのようなタイトルをつけました。

まず自己紹介をさせていただきます。私はロジャー・スカーヴィック、三十歳です。ノルウェー北部のカウトケイノ（Kautokeino）という町の出身です。現在は、サーミディギ（Sámediggi）という、サーミの国会にあたる組織で働いています。一九八九年以来政治に関わってきましたが、後ほどお話しいたしますフィンマルク決議（Finnmark Act）を手にする過程にもいろいろと関係してまいりました。

また、先住民の若者との国際的な連携にも精力的に取り組んでいます。実は私は学生でして、コンピューターサイエンスと人類学の勉強をしているのですが、このようにしょっちゅう世界中をあちこち回っておりますので、試験を受ける時間がありません。ですからきっと五年後、十年後、二十五年後も学生をしていることでしょう（笑）。

今日は、三つの資料をもとにしてお話を進めたいと思います。一つはサーミディギについての資料。二つ目は、世界の先住民の権利、人権に関する国連の調査委員会に出された報告書です。これを国連に出したのはサーミの委員長だったのですが、サーミの議会の中にもいろいろな見解がありまして、三つ目の資料はサーミ議会の野党側が出した見解です。このことからも、サーミと一口に言ってもその中にはいろいろな考え方、見方があるということをご理解いただけるかと思います。これら三つの資料に加えまして、今日は私自身の個人的な見解も盛り込みお話しさせ

ていただきます。

サーミの歴史と文化

スカーヴィック　サーミ語では、自分たちのことや自分たちの言葉のこと、住んでいる国土のことをサプミ(Sápmi)といいます。長く、日照時間が短い冬、そして短くも美しい夏、これが、サーミが住んでいる北方地域です。私たちは、西側ではカナダのイヌイットやグリーンランドの先住民、東側ではロシアにいるネネッツ（Nenets）、コミッツ（Komits）などという民族と親しい関係を築いています。

サーミは四つの国（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシア）にまたがって生活をしています。それぞれの人口を割り出すのはなかなか難しいのですが、ノルウェーが四万人、スウェーデンが一万五千から二万五千人、フィンランドが七千五百人、ロシアが二千人前後ということです。

現在はこのように四つの国にまたがっていますが、もともと私たちの祖先は国境などない時代からこの広い地域に住んでいましたから、国は分かれていてもサーミの間には共通の言語と文化

と伝統があるわけです。サーミは遊牧民で、トナカイの群れを追って生活をするのが伝統的な暮らし方です。サーミには、共通の言語や文化、伝統の他に、サーミの旗、サーミ国家の日、そしてサーミの国歌もあります。

サーミ民族の旗は一九八六年に行われたサーミ会議において制定されました。デザインはサーミの芸術家、アストリッド・バール（Astrid Bål）という人によるものです。サーミのマジックドラムと言われる太鼓（runedom）がモチーフで、サーミ民族の創世伝説「私たちは月と太陽の子どもである」にのっとり、月の部分が青、太陽の部分が赤で示されています。この民族旗を掲げる日が、いろいろと定められています。

さらに、サーミには民族の歌（Sami soga lávlla/Song of the Sami People）もあります。作曲者のイサック・サバ（Isak Saba）は一九〇六年にサーミ初のノルウェーの国会議員となり、一九一二年まで翌期も議員を務めました。

二月六日は、サーミ国家の日となっています。これは全ての地域のサーミに共通ですが、祝い方はさまざまです。サーミ国家の日は一九九二年の第十五回サーミ会議において制定され、翌一九九三年の国連の「国際世界先住民族の日」の公式開会の席で祝われたのが最初です。二月六日という日が選ばれたのは、一九一七年にサーミ国家会議が初めて開かれた日だからです。

サーミ語はフィン＝ウゴル（Finno-Ugric）語グループに属し、最も近いのはフィンランド語、ノルウェー語やドイツ語にも似ているとされています。十の方言と六つの表記法があり、サーミが住んでいる地域では国境を越えてさまざまに使われています。サーミ語を話す正確な人口は分かりませんが、一九九九年のサーミ語使用調査によると、ノルウェーにはおよそ二万三千人のサーミ語を話す人がいると言われています。

サーミディギの取り組み

スカーヴィック　サーミにとっても、同化政策の歴史は、他の先住民族と共通する部分があります。マジックドラムや聖地が廃止され、学校でのサーミ語の使用や伝統的な歌ヨイク（joik）が禁止されました。また、土地を買うためにはノルウェー語の名前を持っていなければなりませんでした。

一九五〇年代からアルタ川のダム建設に関して、アルタ・カウトケイノ紛争というものが起こりました。これはさまざまな動きを経て一九八二年に収束しましたが、その後一九八〇年代を通して、ノルウェーにおけるサーミのさまざまな権利問題の話し合いを促しました。そして一九八

九年十月九日に、ノルウェーのサーミディギが開会されことになるのです。

サーミの国会であるサーミディギは現在、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーの各国それぞれにあり、国内でのサーミの権利を守る公の管轄機関として活動しています。サーミディギの選挙はノルウェー議会選挙と同時に四年毎に行われ、選挙人名簿に登録された人のみが投票できます。サーミ選挙人名簿に登録するには、十八歳以上で、自分をサーミとして認め、サーミ語を母語とするか、少なくとも両親、祖父母、曾祖父母のうち一人がサーミでなくてはなりません。議員は十三の選挙区からそれぞれ三人ずつ選ばれ、三十九人で構成されます。

サーミディギはノルウェー中央政府から決定権を移行されたサーミの文化遺産、教育、ビジネス、産業や文化について権限を持っています。また、中央政府からの予算の分配、管理なども行っています。しかし多くの場合、サーミディギは諮問機関にすぎません。一九八九年の設立から、サーミディギとの責任、決定権の移行が中央政府との間で継続的に行われています。

サーミと政府の土地所有・管理上の対立

スカーヴィック　ここで、土地所有権・管理について三つの事例を簡単にご紹介します。まず、

私と関わりの深いフィンマルク決議は、ノルウェー北部のフィンマルク地方の土地所有権についての問題です。アルタのデモの余波後、一九九七年に提出された報告書から始まって、政府は今年、「先住民族としてのサーミの権利はなく、地域全住民に同じ権利が与えられる」という決議を出しました。

しかし、サーミディギはこれをさまざまな理由で拒否しました。なぜなら政府は、サーミ権利委員会が二十三年にもわたって訴えてきたことを無視し、サーミの過剰な領土紛争の根本はサーミであるとしたのです。国際法に従えばサーミのみが受け継いだ権利を管理できるはずなのに、それを認めず、サーミ領土の使用権を、全てのＥＵ（ヨーロッパ連合）の人々を含むサーミ以外の人々にまで広げたのです。こうした事柄に対する政府の論議はまだ行われておらず、今後、他地域の権利の状況などの調査が行われる予定です。

二〇〇一年、セルブ地方で、トナカイ使いと私有地所有者間の土地利用、権利について、ある判決が出されました。トナカイ使いが勝利し、ノルウェー最高裁判所はサーミがノルウェーの先住民族であることを明白に公言したのです。

同年、マンダーレンで地元の人々が長年使ってきたスヴァルツコッグ(Svartskog　ノルウェー語で「黒い森」）の広大な原野は誰のものか、ということがノルウェー政府と土地所有者間で話し

合われました。地元の人は、今まで取り上げられなかったのだから土地は自分たちのものだと主張し、一方ノルウェー政府は、国のものだから国の土地管理会社によって管理すべきだと言いました。判決は土地所有者の見解を支持し、地元の土地所有者が長年利用していたのだから、土地は彼らのものだとしました。そして、地元の人は土地所有権を個人としてではなく、一集団として得ました。この判決は、長年の利用を条件にサーミのグループが共同で原野の所有権を得た最初の、現在唯一の判決です。

その他、政府と私たちサーミ民族の間との対立をいくつか紹介しますと、次のようなものがあります。例えばバレンツ海における原油、ガスの開発、それに対する反対。また、沿岸部に住むサーミの漁業権。軍隊がサーミの土地を使い、爆撃や火気を使用したさまざまな訓練を行っていることに対する反対。多国籍企業などがサーミが使用している土地に侵入し鉱物資源を採取しようとしていることに対する反対。さらに、サーミが今までずっと計画してきた、自然を守っていくべきという主張。また、サーミの遊牧生活に支障を与えるさまざまな動物が急激に増えたり、それに対する狩猟の制限が行われたりすることについての主張。土地権。これらが私たちの主張です。

国際社会の中のサーミ

スカーヴィック　最後にグローバリゼーションについても簡単にお話ししたいと思います。これまで説明した通り、私たちサーミ民族の権利は、ノルウェー国内でサーミ民族自身が立ち上がることによって獲得してきたものがほとんどです。しかし、現在では国際的な動きが活発になり、国連で先住民の権利宣言が採択されたり、人権を守る作業委員会その他などが設置されたり、さまざまな試みが注目されていることなどから、これからは国際的な動きや法規なども有効な道具として駆使しながら活動を続けて行きたいと思っています。

グローバリゼーションについてもう一言付け加えたいと思います。私たちはコカコーラを飲んだり、ロックンロールを聴いたりするのも拒否するべきなのでしょうか。それとも、時の流れとして身を任せる方がいいのでしょうか。これは、ノルウェーでノルウェーの人々が疑問としている問題ですが、もちろんサーミもグローバリゼーションの影響を受けています。

去年、ニューヨークで国連の先住民に対するフォーラムが開催されました。このときも大変感動したのですが、今回のこのシンポジウムでも、皆さんと、それから世界中の先住民の方々と知

り合うことができ、喜んでいます。このような、世界の人と連帯できる貴重な機会を得たことも、グローバリゼーション、国際化がもたらしたプラスの面であることは確かです。

年間を通して一番大きなお祭りであるリドゥーリドゥー（Riddu Riddu）では、サーミのデザイナーによるファッションショーも行われます。若者が身につけているのはサーミの伝統的な衣装ではないこともあります。しかし、デザイナーはサーミ出身の人です。そういう意味では、そこにサーミの現在の文化であるわけです。このように、伝統的な文化と現在のサーミの有り様を上手く融合して、これからも力強い文化を持ち続けたいと思っております。

最後にこのような場所にお招きいただきまして本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

司会（小野）　今日は、日曜日というのに、皆さん、本当に熱心に参加していただいてありがとうございました。これでシンポジウムを終わりたいと思います。非常に素晴らしい通訳をしていただいた山之内悦子さんにも拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

あとがき

コーディネーター　小野　有五（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

グローバリゼーションに対抗して、地域によるガバナンスを確立することは可能であろうか。この問題を、地域のなかでも社会的弱者という立場におかれていることが多い先住民族やマイノリティとともに考えてみたいというのが、このシンポジウムの目的であった。予算的な制約もあり、海外の先住民族をお呼びすることは無理かと思っていたが、さいわい二〇〇三年八月四日から一週間、帯広で、アイヌ民族と世界の先住民族の若者たちの交流を目的とした「ワールド・ユース・キャンプ２００３」が開催されることになり、そのために来道された、マオリ、フパ、サーミの三民族の方々に参加していただくことができた。通常のシンポジウムとは異なり、それぞれが、伝統的な歌や衣裳や、さまざまなコトバの響きを駆使した講演をしてくださったことは、ガバナンスというものの原動力、原点を考えるうえで深い意味があったと思う。文字として印刷されたかたちでは、そのすばらしさを一部分しかお伝えできないのが残念である。

また午後は、アイヌ民族から、小川隆吉さん（アイヌ民族共有地財産訴訟原告団代表）と阿

部ユポさん（社団法人・北海道ウタリ協会理事）のお二人に加わっていただき、ここにおさめた三つの講演をふまえてのパネル・ディスカッションを行った。口絵写真の背景に張られた大きな幕は、この直前にジュネーヴで開かれた国連の第二十一回先住民族ワーキンググループの会議で、小川さんが使われたものであった。ジュネーヴでマオリの代表から欲しいと言われたのを、札幌でのこのシンポジウムに使いたいからと断られて、わざわざお持ちいただいたものである。そうした話題を含め、パネルディスカッションもきわめて興味深い内容であったが、紙幅の都合で収録できなかったことをお詫びしたい。参加してくださった方々、熱心に討論に参加していただいた聴衆の方々にあらためて御礼申し上げます。

アイザック・ビシャラ（Issac Bishara）

一九六八年、ニュージーランドのタウロンガ・モアナ生まれ。ニュージーランドの先住民族マオリ族のナティ・ランギヌイ族とナティ・トゥファレトア族の血をひく。一九九七年、ニュージーランドのテ・ファレ・ワナカ・オ・アオラキ（大学のマオリ語名）／リンカーン大学資源学部卒業。二〇〇二年、同大学院資源学修士課程マオリ・コミュニティー開発専攻修了。二〇〇三年よりニュージーランド環境危機管理局のマオリ政策アドバイザー。

マーセリーン・ノートン（Marcellene Norton）

一九四〇年、アメリカのカリフォルニア州フパ生まれ。アメリカ先住インディアンのフパ族。ユーロック族とカルック族の血もひく。一九八三年、アメリカ・カリフォルニア州にあるソノマ大学卒業。一九八二年より現在までフパ民族教育局長として、幼児から成人までの様々な教育プログラムの運営や、地域・州・国レベルでの教育関連の委員会にも携わってきた。

ロジャー・スカーヴィック（Roger Skarvik）

一九七二年、ノルウェーのカウトケイノ生まれ。北欧先住民族のサーミ族。現在大学にてコンピューター・サイエンスを専攻。フィンマルク労働党青年同盟議長、フィンマルク・カントリー青年問題評議会議長、フィンマルク・カントリー社会健康問題評議会評議員を経て、二〇〇三年三月よりサーミ議会顧問。

コーディネーター

小野有五（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

刊行の言葉

日本社会を覆う改革の潮流の中で、大学も知の孤塁から社会に開かれた知の拠点になるべきことは言うまでもありません。北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センターも、二〇〇〇年四月の発足以来、社会科学の最先端の研究成果や各界の知的リーダーの叡智を社会にフィードバックすることを目指してきました。

二十一世紀に入り、日本は政治、教育、経済などあらゆる分野で混迷の度を深めています。改革という言葉は政治家の口からもマスメディアにも頻繁に語られていますが、何が改められるべき課題であり、どのような道筋をたどって改革を進めるべきかという基本的な部分で、議論が十分深められているとは言えません。

改革とは一握りのリーダーによって可能になるものではありません。広範な市民が同時代に存在する政策的課題を認識し、その解決に向けた基本的な理念を共有してこそ、時代は動いていくということができます。市民による同時代に対する認識を深めるための手がかりとして、ここにセンターブックレットを刊行します。

当センターは今まで、国政や地方政治の前線で活躍するリーダー、同時代の日本や世界を鋭く分析する作品を発表した研究者など、様々な方々をお招きし、知的触発の場を設けてきました。それらは、日ごろマスメディアでは伝えられないような生きた現実に関する体験的分析であったり、社会科学の研究の醍醐味を教えてくれるものであったりします。こうしたゲストのお話が一度限りで消えてしまうのはもったいないことで、そうしたシンポジウムの記録を広く地域社会と共有するために、このブックレットは作られました。

今の日本では、効率優先、実利志向に基づく改革の中で、大学における社会科学の研究の意義が見失われかねないという現実があります。しかし、私たちが真に主権者として、社会の担い手として、自分たちの生きる国や地域社会のあり方を作り変えるためには、一見迂遠であり、無益に見えても、政治や社会の課題について考え、議論するという作業を蓄積することが土台になるはずです。このブックレットを通して、大学のそのような活動について理解していただき、議論の広場に参加していただければ、幸いです。

二〇〇二年十一月三〇日

北海道大学大学院法学研究科
附属 高等法政教育研究センター長 山口二郎

文部科学省科学研究費学術創成研究⑵　14 GS0103
「グローバリゼーション時代におけるガバナンスの変容に関する比較研究」

ACADEMIA JURIS BOOKLET 2003 No. 11

先住民族のガバナンス
―自治権と自然環境の管理をめぐって―

2004 年 2 月 25 日　発行

著　者――アイザック・ビシャラ　マーセリーン・ノートン
　　ロジャー・スカーヴィック　小野有五（編）

編　者――北海道大学大学院法学研究科
　　附属高等法政教育研究センター

発行者――山口　二郎

装　幀――山本　健二（海洋飛行）

編集協力――㈱北海道新聞情報研究所

印刷・製本――㈱アイワード

Printed in Japan
ISBN　4-902066-10-6　C 0031
©北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター